

## 沖縄県の学習 —身近な地域を調べよう

沖縄県北谷町立桑江中学校 山里賢吾

### 1 はじめに

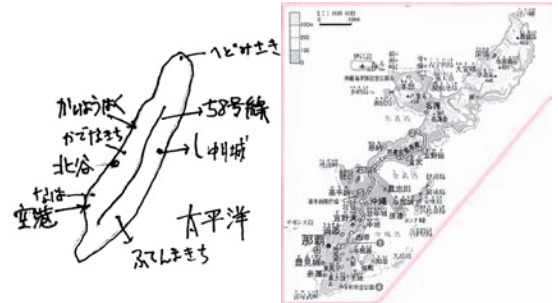
社会科の授業を行う中で、愕然とすることがしばしばある。子どもたちは地歴の学習を通し、さまざまな地域のことは「知識」としてよく理解している。しかし「自分が住んでいる地域」のことをあまり「知らない」。学習指導要領では「身近な地域」を観察や調査などを通し、理解や関心を深めさせるとあるが、実際生徒たちは自分の住んでいる地域には自発的に関心をもつことは多くないし、別段知ったところで何になるの？という状況である。本稿では地域学習の基本的な指導法について振り返ってみた。

### 2 桑江中学校の立地

桑江中学校は沖縄本島中部の北谷町に位置し、生徒数475名の中規模校である。近年観光地として脚光を浴びている「ハンビー・美浜地区」を校区に擁する。町の中央には広大な米軍基地が存在し、町面積の実に約53.5%を占めて町の発展の妨げとなってきた。1972年の日本本土復帰後、米軍用地の返還が順次行われてきており、その都度「白紙」の状態から都市形成を行うことができた。しかもそれらの都市計画が時代のニーズに合致したものであったが故にめざましい発展を遂げ、県内外から注目を集めている地域なのである。子どもたちはその発展の背景や新興商業地が周辺地域へ与える影響力を含め、地域の特色について理解が不足していた。

### 3 沖縄県を(北谷町周辺を中心に)ながめてみよう

ある日、生徒たち(1.2年生)に白紙を渡して「沖



縄本島を描きなさい」と指示してみた。数分後、社会科教師としての自信をなくしてしまうほどの「悲惨な沖縄本島の地図」が続々と生徒の机上で完成していった(図1)。続けていくつかの県内の有名な観光地、主要幹線道路や空港、北谷町および(近隣)市町村の位置等を記入しなさいと指示すると、生徒たちは困惑してしまい、指示したものの6~7割程度しか地図に書き込めない。しかも位置や方角がいい加減で地図として役に立たない。教室は騒然とし、こんな声で溢れた。「俺たち、マジでヤバくない？」さて、そんなとき我々社会科教師はどのような指導・援助を行えばよいのだろうか。

**問題点：**地図が書けない→居住地域と他地域の関わりが理解しにくい。

**目標：**居住地域と周辺部の位置関係を知る



「思考する力」の素養形成ができる！

学習の展開 (対象2学年、各学級を5~6名の5ないし6グループにわけて学習)

学習のスケジュールは下図のようにシンプルなものにまとめた。

時間	学習内容
1時間目	課題提起（グループ）
2時間目	課題調査（個人）
3時間目	課題調査（グループ）
4時間目	レポート作成
5時間目	グループ発表とまとめ

## 1 時間目の学習

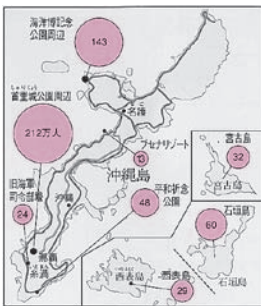
	課題	方法	留意点
①	北谷町の地図を描こう！	小グループで1枚の町の地図を制作	何も参照させずに描かせる
②	できた地図を実際の地図と照らし合わせよう	位置が正確な場所と正確でなかった場所のチェック	公共施設や子どもたちのよく行くスポットを記入させる

地図を描かせる際に留意させたのが「道路」である。子どもたちには交通インフラが与える地域の発展力について考えさせたかった。とりわけ沖縄県においては他府県と異なり交通手段の選択肢として「鉄道」がなく、遠中距離の移動手段としてはもっぱら自家用車やバスなどにかぎられてしまう。線状都市的な発展が沖縄県では顕著であり、生徒たちの意外なほど行動半径が狭い。「地域」を俯瞰的な感覚で感じたり知る機会が少ないのである。（この状況を冷静に考えてみると、高校生や大学生と違い、中学生は生活圈ないし行動圏が狭い）

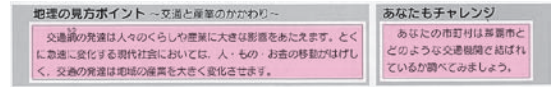
以下のキーワードを子どもたちに与えた。

**集まる→もの・人→物流とは？**

思考のポイントとして二つを与えた。沖縄県は第3次産業の比率が高く、観光業による収入が大きい。そこで地理資料の図「おもな観光地の観光客数」を思考の参考にすることを指示した。また、資料下の「地



理の見方ポイントー交通と産業のかかわりー」も思考の参考にすることを指示した（次図参照）。



特に本町は他府県からの観光客および他地域からのショッピング客が多いことも考えようと指示すると、次のような疑問が子どもたちからでてきた。

- ・なぜこんなに人が集まるのか（騒音・渋滞が北谷町では深刻な状態である）
- ・基地が返還されてなぜ町が発展したのか
- ・これから北谷町に何ができるのか
- ・近隣の市町村に大型ショッピングセンターが次々とできているが、お客さんは北谷町に来なくなるんじゃないのか？

地図の作成が一段落して(月)に移り、グループごとに地図を比較させる。

そして、「なぜここに〇〇があるのか（集中しているのか）」と発問し、子どもたちに自由に討論させる。

## 2～3 時間目の学習

### 課題調査（個人およびグループ）

前時で出された各課題をもとにまず個人に課題の割り振り、個人調査で知り得た事柄を全体に図った。子どもたちの中から出てきた課題をいくつか挙げると

- ・住宅地と商業地が分けられている地域、混在している地域があるのはなぜか
- ・比較的新しい店舗はなぜ公共駐車場の近くにあるのか
- ・なぜ道路が入り組んでいる地域と碁盤の目状の道路の地域があるのか

インターネットでの検索（北谷町役場ホームペ

ージ<http://www.chatan.jp/>)や、町教育委員会発行の地誌『北谷町の自然・歴史・文化（平成8年3月発行）』等を参照する生徒が多く、がんばって調べる子どもたちが多かったが、必要とするデータを手に入れることはかなり厳しい状況にあった。そこでフィールドワークに出よう、という声が上がった。時間の制約もあったので、野外調査は持ち帰り宿題という形にした。幸いにも『沖縄県版中学生の地理資料』（以下、地理資料と呼称）の「第2部さまざまな地域の調査?1章、2章」において、フィールドワークの基本的な方法がわかりやすく記載されているのでそちらを活用した。

#### 4 時間目の学習（レポート作成）

##### 留意点

- ・メイン疑問（1つ）とサブ疑問（複数）を明確に分ける  
（次時発表ではメイン疑問のみ詳細に調べ発表、サブ疑問は最後に口頭のみで発表）

子どもたちは、地域調査について当初手探りの状態であったが、地理資料をもとにして地域調査のノウハウを学ぶことができ、地域調査の計画まで自らたてることができた。

子どもたちは各自で課題調査を行い、それぞれが持ち寄ってきた（結局親に聞いたり、近所の店舗や老人に聞くと行った形にのみになってはいたが）。なぜここに〇〇の店が多いか、なぜここで渋滞が多いのか、以前と現在で何がどう違って来たのか…。聞き取りした大人の主観が相当入ってはいたが、地域に住んでいる住民の生の声が反映されていて、書籍やネット検索よりも中身の濃い結果を子どもたちは持ち帰っていた。上記の「メイン疑問」と「サブ疑問」は、あがった疑問を全部発表するには時間が足りず、かといって疑問を捨てるのも忍びない。とりあえずこの時間はメイン疑問の解決のみに集中してもらい、残ったサブ疑問は「疑問をもち続けること」に意味をもたせ、日常生活の中で、もしくは別の機会・他教科・総

合的な学習等での新たな学習課題になってくれれば…との期待を込めてあえて問題提起のみの扱いとした（発表用シートは学級掲示とし、常に子どもの目に触れさせるよう配慮する）。

#### 5 時間目の学習（発表）

五つのグループが出したメイン疑問は以下の通りであった。

1グループ	道の広さと渋滞
2グループ	他市町村の観光地と北谷町の観光客のながれ
3グループ	基地返還後の跡地利用
4グループ	飲食店について
5グループ	北谷町に造ってほしい施設

特に内容が秀逸であった2グループは本町が交通アクセスのよい本島中部にあること、そして着眼したものが「コンビニエンスストア」の店舗によって異なる商品構成であった。住宅街の中にあるコンビニは一般的な品揃えしてあるのに対し、国道沿いのコンビニは観光客向けのおみやげ品や休憩スポット、余裕のある駐車場をそろえてあることを指摘、人の流れを意識したものであると指摘した。ちなみに彼らのサブ疑問の一つは「中古車店はなぜ集中して立地しているのか」であった。

#### 4 本学習で感じたこと

都市化の波→基地返還後の発展、土地利用  
都市のデザイン→都市形成→「発展・成長する町」→予想を超えた発展→都市の変容を見つめる子どもたち→どう受け継ぎ、どう生かしていくのか？

地図も描けなかった子どもたちが意識して地域を見つめ、バラエティに富んだ疑問を見つけ解決していく様は、とても楽しく、頼もしかった。これからもさまざまな場面で地域学習を展開し、子どもたちが地域に進んで目を向ける援助を行っていきたい。